

# 年間5000

OB

探訪

## マー君ヤ軍入り

大リーグ、ヤンキースで前楽天・田中将大投手が投げる2014年シーズンは昨年以上に忙しくなりそうだ。大リーグ評論家の福島良一さん(57)は中央大学の卒業生。学生時代に大リーグに興味を持ってからというもの、シーズン中に見る試合は500を超える。その生活たるや選手以上にハードである。



大リーグ評論家  
福島良一氏

# 試合以上見る さらに多忙

「シーズン中は1日に2～3試合は見ますね。ニューヨークのデーゲームは日本時間午前2時すぎ開始。ナイトゲームが朝8時すぎから、ロサンゼルスなど西海岸のナイトゲームが11時すぎから始まります」

米国で次々にプレーボールがかかり、ゲームは佳境を迎え、試合が終わる。延長戦もある。大リーグは決着がつくまで続ける。

ダルビッシュ有(レンジャーズ)、黒田博樹(ヤンキース)、岩隈久志(マリナーズ)、上原浩治、田沢純一(ともにレッドソックス)各投手に加え、新たに加入した田中投手。大リーグ野球を見る目はいつも厳しいが、日本人投手が登板した試合は全投球を記録している。1球も見逃さない。気迫の観戦取材である。

野手ではイチロー(ヤンキース)、青木宣親(ロイヤルズ)ら各選手がいる。こちらにも目を光らせている。

「日本でテレビ中継のある試合は見ないと気が済まないのです。シーズン中はいつ起きて、いつ寝ているのか、分からないくらい。完全に野球中心の生活になっています。1日24時間では足りないですね」

見終わると、原稿を書く。ニュース

があるときはコメントを求められる。

田中投手がヤンキースと契約した内容は総額1億5500万ドル(約161億円)の7年契約。大リーグ投手では史上5番目、日本人投手としては史上最高額になった。

『ヤンキースはこれまでも大物選手を獲得してきたが、田中投手の契約総額は投手では史上5番目に相当するだけに、期待

の大きさを感じる』(1月24日付、産経新聞)

契約している新聞には独自情報を出す。田中投手のヤンキースでの背番号が「19」と決まったときだ。

『ヤンキースの背番号19の名投手には、まずビック・ラッシーが挙げられます。メジャー2年目の1947年に19番をつけ、後に16番になり、49年から53年のワールドシリーズ5連覇した時のエースとして活躍。その後もフォード、ターリー、リゲッティなど名立たる投手が19番を背負いました。野手では2003年にワールドシリーズへ導くサヨナラ弾を放ったブーンがいます』(1月



マニア垂涎、ホワイトソックスの歴史あるユニホーム

26日付、日刊スポーツ)

国内のスポーツ・マスコミが「楽天時代の18番にプラスワンの19番」「楽天の前監督、野村克也氏が現役時代に付けた19番」などと紹介しているなか、『ヤンキース19番物語』は大リーグ解説者の腕の見せどころであった。

## 中大時代

中大時代には、既に大リーグのとりこになっていた。当時はいまのようにNHK衛星放送などテレビ中継がない時代。

「FENを聴いていました。在日米軍向けの放送です。もちろん英語で、最初のうちはチンプンカンプンでした」

後に野球中継は週に5試合ほどと分かったが、いつ放送があるか分からない。

「野球放送の告知がときどきあるので、1日24時間つけっ放しにしていました。ある日、既にゲームが始まっていて、慌ててスコアブックを付け始めたこともあります。聴いているうちに選手の名前を覚え、いろんな情報を得る。夢が広がって、最大の楽しみでしたね」

日本人選手はいなかった。1964年9月に元南海(現ソフトバンク)の村上雅則投手がジャイアンツに入団、日本人初の大リーガーの誕生だったが、2年で日本に帰国した。以来、近鉄の野茂英雄投手がドジャースと契約するまでの29年余。日本人選手不在の寂しい時代だった。

「そんなときですからね、僕が覚えた選手の名前を言っても誰も分かってくれない。周囲は大リーグに興味を持っていなかった。当時数少ない大リーグに関心のある友人たちと『アメ



中大駿河台キャンパスで、当時では珍しい大リーグのスタジアム・ジャンパーを着ていた(本人提供)

リカ野球愛好会』なる会をつくっては、活動していました。でも、中大に大リーグの友はいなくて、仲間は大リーグの友は大学以外でした」

東京・銀座の洋書店などへ行って米国発行の大リーグ専門誌を探す。洋書スポーツの書棚には、大リーグ関係は少なく、テニス、ゴルフ、釣りなどが幅をきかせていた。選手名鑑、記録集などは予約注文、手元に届くには随分と時間がかかった。

「父親譲りと言いますか、凝り性でして。一つのことに熱中するタイプ

でした」

## 小学6年生で目覚めた

大リーグに心を奪われたのは小学6年生だった。1968年。川端康成がノーベル文学賞を受賞し、米国ではニクソン大統領が誕生する。その秋にカージナルスが来日した。

福島少年は本場アメリカのベースボールを初めて見た。ユニホームの胸には紅冠鳥(カージナルス)が2羽、バットに止まっていた。日本では見たこともない斬新なデザインだ。

『それに大黒柱ボブ・ギブソンの一塁側へ倒れ込む豪快なピッチング・フォームが、当時小学校六年生だった私にはとても印象に残っている』(著書・大リーグ物語、講談社現代新書)

1973年高校2年夏には、父親の援助を受けて米国行きを実現させ、大リーグ観戦を堪能した。

1977年、20歳の夏。今度は一人で米国へ。メジャーリーグ、マイナー



自宅書棚には大リーグ球団別のファイルなど資料がびっしり



移転後もない中大多摩キャンパスにて、スーツ姿が決まっている(本人提供)



安打製造機といわれた大スター、ピート・ローズとの記念撮影

リーグの試合を追いかけ、70日間で全米21都市を回り、74試合を見た。

「それまでずっとFENを聴きながら選手のプレーや球場の雰囲気想像していました。アメリカへ行くと夢の世界が目の前に広がって、ほんともう感動しましたね」

年々深まる大リーグへの関心。きっかけは大リーグ通で知られた伊東一雄さん(元パ・リーグ広報部長、故人)との出会いだった。高校時代に東京・銀座のパ・リーグ事務局を訪ね、うれしいことに同じ市内に住んで

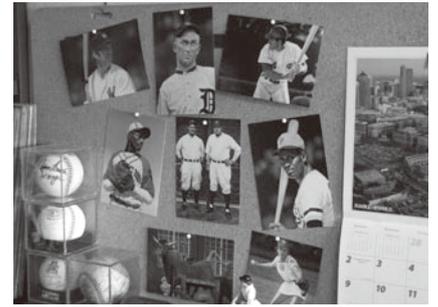
いることが分かった。

「それから家族ぐるみのお付き合いをしていただき、僕にとっては師匠であり、伊東さんの存在によって、この道へ進むようになりました」

大学時代の大リーグひとり旅では、伊東さんが各球団へ紹介状を書いてくれた。

そのころ、またしても印象に残る出会いがあった。伊東さんとともにハワイで知り合った交換留学の女子高生が、後に中大に入学してきた。

「ESS(英語学会)の会長をする



書棚脇には名選手の写真とサインボール

など、積極的に活動していて、彼女は2歳下ですが、僕は励まされ、勇気づけられました。かけがえのない人でした。野球には興味がありませんでしたが、あちこちへ食事やドライブに出掛け、野球観戦にも付き合ってくれるなど楽しい思い出ばかりでした」

卒業後に連絡が途絶え、久しぶりに彼女の実家へ電話を入れると、病死したという。29歳、若すぎる突然の別れだった。

「強いショックを受けました。彼女の実家の眼前に広がる瀬戸内海の海がきれいで、感動したのをいまでも覚えています。大学時代、一番の思い出です」

中学・高校は学習院で学んだ。学習院大へ進学するのが一般的とされるなか、福島さんはスポーツを理由に中大を選んだ。

「伝統を重んじる校風に嫌気がさして、環境を変えたかったんですね。プロ野球選手を数多く輩出している野球の強い中大を選んだ。中高と6年間同じところにいて、刺激がほしかったんです」

自身に選手経験はないが、野球が好きでプロ野球をはじめ、大学野球や高校野球を見て回る日々だった。学習院大は東都大学野球で1958年秋に優勝したのだが、その後は精彩を欠いたままだった。

## 田中投手に20勝の期待

中大卒業後は旅行代理店に勤務。大リーグ観戦ツアーを企画して、自ら添乗員となり、全米各地を案内した。マスコミから依頼される原稿執筆も行ってた。

1987年。歴史が大きく動いた。NHKが衛星放送で大リーグ中継を始めた。このとき解説者に選ばれた。日本人選手はいないが、日ごろの勉強の成果が出て、活躍する大リーガーに関する豊富な情報量と明快な語り口で、評価はますます高まった。以来、この分野の第一人者となる。

昨季開幕から24連勝の田中投手には、日本人初の20勝投手の期待がかかる。これまでは松坂大輔投手(2008年＝当時レッドソックス)の18勝が最高だ。

「日本人選手の活躍によって、大リーグの人气が上がり、本当にうれしい悲鳴です。おかげさまで僕らもいろいろと仕事させていただき、生活できるわけで。こんな時代が来るとは、思ってもみませんでした」

「いまの情報過多時代に生まれ育っていたら、大リーグには興味を持っていなかったかもしれません。子供のころ、メジャーリーグは海の向こうの遠い夢の世界。だからこそ知りた



自宅前で、表札は野球のホームベースだった

いために、ちょっとしたことでも調べていました」

「日米野球の交流が盛んになって、アメリカの国民的娯楽が国際的になった。この世界で仕事をさせていただくことは最高の幸せです。野茂投手らすべての日本人プレーヤーには感謝の気持ちでいっぱいです」

大リーグ野球と生活をともにする。

自宅表札はホームベースで出ていた。

略歴 福島良一氏(ふくしま・よしかず)

1956年10月3日、千葉県生まれ。学習院高等学校—中大商学部。高校2年で初渡米して以来、毎年のように米国で大リーグ取材する。著書に『大リーグ物語』(講談社現代新書)、『大リーグ雑学ノート』(ダイヤモンド社)ほか。最新書は『日本人メジャーリーガー成功の法則 田中将大の挑戦』(双葉社)。

### 年表<村上投手からイチロー選手まで>

- 1964年 9月 元南海の村上雅則投手がジャイアンツに入団。日本人初の大リーガー誕生。
- 1977年 9月 巨人の王貞治選手が通算756号本塁打を放ち、ハンク・アーロン(ブレーブス)の大リーグ記録を抜く。
- 1983年 6月 阪急(現オリックス)の福本豊選手が通算939盗塁を成功させて、ルー・ブロック(カージナルス)の大リーグ記録を更新。
- 1987年 6月 広島衣笠祥雄選手が2131試合連続出場記録を打ち立て、ルー・ゲーリッグ(ヤンキース)の持つ大リーグ記録を塗り替えた。
- 1994年 9月 大リーグは選手ストの解決のめどが立たず、シーズン打ち切りを発表した。
- 1995年 1月 近鉄の野茂英雄投手がドジャースと契約。
- 1996年 9月 野茂投手がロッキーズ戦でノーヒットノーランを達成。
- 1997年 1月 オリックスの長谷川滋利投手がエンゼルスとの金銭トレードで入団。  
同年 5月 ロッテの伊良部秀輝投手がヤンキース入り。
- 1998年 1月 FAの吉井理人投手がメッツと契約。
- 2000年 12月 オリックスのイチロー選手がポストिंग(入札)でマリナーズ入り。



シカゴ・コミスキーパークで実際に使用したスタンドの椅子、競売で手に入れた